

自由民主党 中央政治大学院  
まなびとスコラ・オープン講座  
憲法に学ぶ「この国のかたち」

第2期「まなびと夜間塾」第10回講座

2021年6月17日

講師：橋本 五郎 読売新聞 特別編集委員

テーマ：「三木・福田・大平・鈴木・中曽根・竹下総裁時代」

よろしくお願ひします。始めるにあたって非常に残念なのは三木（武夫）から竹下（登）までをわずか45分、いくらなんでも短いのではないか、そう思ひます。1日あつても足りないぐらいなのですけれども、そこは手短かにお話ししたいと思ひます。

私が政治記者になつたのは、社会部で1年やりましてから、1976年の5月です。ちょうどその日、「三木おろし」を読売新聞がスクープしました。椎名（悦三郎）工作が発覚してもう国会・官邸は、てんやわんや。それからずっと、三木さんが任期満了で辞める12月まで、すったもんだでした。

危機というか、政治的な、ある意味では非常時において、その人の本質が表れるというのはよく分かるのですね。これからお話しすることは政策より、主に総理大臣のキャラクターというか、皆それぞれ、総理になるというのはえらいことなのです。これはもう、ひとかどの人じゃないとできないのですよ。なぜか？我々も何だかんだと批判しますよ。だったら、お前やってみろ、と言われても出来っこない。大変なものです、そこまで昇りつめるのは。

それから、代議士の皆さんもそうでしょうけれど、選挙で10万近い票を得るといふことはえらいことです。私が突然なつたってダメです、親戚だってちゃんと入れてくれるかどうか分かりませんからね。そう考えると、そういうことを積み重ねながら最後に総理になるというのは、運もあるでしょうけど、やはり「人間的な魅力」がなければ、そこまで行かないと思ふのです。

ということで、まず三木さん（武夫／第66代内閣総理大臣）。どういふ人だったかといふと私は、禁治産者、禁治産者って民法に言うでしょう。ほとんど生活能力がないといふか、日常生活がほとんどできない人ですよ。幾つか例を挙げましょうね。

例えば、外遊から帰ってきますと、私たち総理番は南平台の三木さんの家の応接間で、三木さんを待っているわけですよ。総理ご苦労さまでしたと。睦子夫人が赤飯を炊くのですよ。赤飯はそんなに柔らかくないですから箸できちんと持たないと、ぼろぼろこぼれるのです。三木さんはろくに箸も持てない人だから赤飯がぼろぼろ絨毯にこぼれる。それを睦子夫人は、身体が倍もあるのだけれど絨毯に膝ついて全部拾うのですよ。そういう人でした。

湯河原に別荘があつた。質素な別荘でね。鉄道の枕木で家を造つたような。払い下げをしてもらつたのか知らないけど、そういう質素な別荘の庭にミカンの木があつたのです。ミカンの木があつて、我々総理番と庭で円になって三木さんが懇談をやるわけです。その

時にミカンが出てきました。そうしたら三木さん、なんとミカンの皮を剥かないで食べようとする。要するに皮を剥くという概念が彼にはなかった。みな奥さんがやってくれたから。

それから昔の官邸、2階にありましたね、総理の執務室。小食堂というところでお昼を食べます。官房長官室の脇を通って階段を下りてくるわけですよ。小食堂へ下りて来るまで、わんさわんさと我々は、当時は総理と距離がないから、もうピタッとくっつきながら、肩をへし合い押し合いしながら小食堂まで下りるのです。ところが、三木さんは昼飯を食うという概念がないから、押されながらぐるりと回って。1階へ下りて、それから認証式の写真（撮影する階段）ありますね、あれをまた上っていくのです。本人も自分が一体どこへ行こうとしているのか。ほとんど関心ない。そういう日常なのです。だから、鬼頭（史郎）判事補のニセ電話事件が起こる。検事総長からの電話ですと三木邸に電話がいくのですよ。それで「指揮権発動」の直前みたいなことにまでなる。

鬼頭という判事補がいて、三木さんのところへニセの電話をするのです、検事総長だと。なぜそういうことになったのかというと、三木さんは一家団欒で晩飯を食うという概念がないから、終わるとすぐ隣の部屋へ行って、ジーコジーコとあちこちへ電話をするわけです。電話でいつもやっているものだから電話に引っ掛かるということになってしまうわけ。そういう具合に、生活的には無能力の人だったが、こと政治になると凄いのです。

三木さんという人は戦後ずっと反主流・非主流。田中角さんの“金権政治”に対して、“クリーン三木”。本当にクリーンだったかは疑問です。だけどイメージとしてはクリーン三木。戦後、一貫して非主流・反主流を通したと言われました。尾崎弴堂（行雄）と並ぶぐらいですからね、経歴のある人ですから。ところが、彼の略歴を見ると、常にいいポストに就いている。非主流・反主流を武器にして、常に日の当たる場所にいたということですよ。バルカン政治家と言われましたね。バルカン半島というのは常に、こっちに行ったりあっちに行ったりしていないと命を永らえることできないのです。凄いのですよ。

私も経験ありますけど、荒船清十郎さんが、「おいお前な、三木はね、膝を揉み揉みするんだ」と言うわけですよ。何のことかなと思ったら、三木さんは人を説得するとき絶対、真向かいに座らない。L字型になって、ここに私がいるでしょ？ 三木さんここにいる。そして膝をなでながら「ねえ、きみ、議会政治は……」と、こうやるわけ。この膝のもみ方、五十何年やっているわけですから、もう相手を骨抜きにするぐらい。完全に戦闘能力をなくしちゃう。

こういうのが発揮されるのはどういう時か。それは三木おろし。なぜ、三木おろしか。第1次三木おろしと第2次三木おろし。第1次三木おろしは、椎名さんという産みの親が三木おろしを始める。なぜ始めるかという、例えば独禁法ね。八幡・富士製鐵が合併する時に、これから基幹産業である鉄のことを考えたら、この合併はやむを得ないというのが自民党の立場ですよ。しかし三木さんは、「いやいや、それは良くない、独占状況になっちゃう」という気持ちもあった。あつたのだけれども、常に非主流・反主流だから、独禁法を改正して企業分割を厳密にやろうとするわけです。そうすると、なんだ、という話になって、産んだ子供が全く違う子供になっちゃったというので、三木おろしを始めるわけです。それに対して何で三木をおろさなければいけないのかと、これが第1次。

第2次は、田中角榮のロッキード。三木の意図としては、ロッキードを通じて田中派を粉砕しようとしたわけです。いいチャンスだということで司法取引をするわけですよ。要するに相手の（アーチボルド・）コーチャン（当時ロッキード社副社長）がちゃんと認めれば罪を問わないようにする。日本に司法取引ありませんから。そういうことまでやる。そうすると惻隱の情がないと言って第2次三木おろしが始まるわけです。「挙党体制確立協議会」というのを、三木・中曽根派を除く4派か何かで作るわけです。議員会館に陣取って、三木をおろそうとするわけですよ。その筆頭にいるのが福田（赳夫）と大平（正芳）です。2人が交渉に官邸へ行くのです。官邸へ行くと、「何で辞めなければいけないのか」。「みんな三木さん頑張れだよ」と。もう連日、葉書が来る（両手で高さを示す）。三木さん頑張れ、ロッキードをちゃんとやれ。これは凄まじいものでしたよ。それがごく普通の人の感覚。

ということで、「こんなに三木さん頑張れと来ているじゃないか、何で辞めなきゃいかんのだ」。「いや、かくかくしかじかだ」と2人が言うでしょう。言っても話し合い決裂になって帰ろうとするわけですよ。すると、まあまあ、帰るのはちょっと待って、いまコーヒーが出るから。また話し合い、決裂、帰ろうとすると、まあ、ケーキが出るから、果物が出るからと足止めをするわけ。

挙党協は会議を開いているわけよ、いまに決裂して帰って来るから…。ところが一向に帰って来ない。引き止められている。なんだ、子供の使いじゃあるまいしと、もう皆がブースカ怒るわけ、福田、大平を…。とうとう決裂。そのあと夕方までかかってしまって、もう駄目だというので2人は帰って来る。帰るとき最後に何と言われたか。

「ところで、私が辞めたとして、どっちが先にやるか」

相談していなかった、福田と大平は。何にも言えなくなっちゃった。ここの凄さ。それですと粘り腰で12月まで。5月に始まったのかな。12月に任期満了選挙になって敗れたことを理由にして辞めた。いやいや凄まじい。政治にかけてはもう本当にすごいという感じね。そのぶんだけ生活的には、ほとんど子供並みでしたね。政治というのはそういうものなのだなど、僕ら思いましたね。

それから、やはりイメージの勝利ですよ。クリーン三木だ。ロッキードを糾明しようとしている。けれども、その本心は、ここで田中派を潰そうという。小泉（純一郎）の郵政と一緒に。政治においては表と裏の両方を見ないと。しかし、だからと言って、やらなくていいのかという話ですよ。ロッキードは徹底的にやらなければいけないし。なかなか判断の難しい、そういう時代ですよ。やはり三木さんというのは本当にすごい。だから三木信奉者がいるわけですよ。建前ではかなわないから。

ということで福田内閣になる。福田内閣って珍しいですよ。というのは、内閣が変わると最初の支持率はみな高いのですよ。あの鳩山（由紀夫）でさえ小泉に次ぐ高い支持率でスタートするのですから。ところが福田さんは終始一貫30%を切っていた。支持が20数%。ふつう30%から下がると危険水域だ、もうあと数か月しかもたないと。ずっとそうですよ。ところが福田内閣は2年間もつわけです。そもそも生まれ落ちた時から、三木おろし・ロッキード隠して登場したから評判が悪いわけです。たしか71歳でしたね、総理になった時は。これだけ支持率の低い内閣が、あれだけ長くもったのは珍しいですよ。何でもったかということ、低いからそれ以上落ちようがなかった。これ、高いと必ず落ちるのですよ。

これは余計なことですが、夫婦と一緒に、あまりに期待が大きければ幻滅は必ず訪れる。期待はそこそこでいい。皆、この人と結婚するならばどんな幸せな人生が待っているのだろうと…。現実はそのじゃありません。期待はそこそこでいいのですよ。あの小淵（恵三）さんみたいに…。小淵内閣は完全に不支持率が上回って、「冷めたピザ」でね。どんどん上がって、1年たったら支持が不支持を完全に上回った。だから期待が最初は少ない方がいい。菅（義偉）の悲劇も、あまりに高かった。あれはよろしくないですよ、かえって。必ず冷める時がやってきますから。

ということで、福田内閣もそうだった。私は歴代総理、安倍総理を含めて24人かな、ずっと見てきたけれども、主義主張と生活とがいささかの齟齬もない。こう言うのは先生の前でわるいけれど、表の顔と裏の顔がね、表では謙虚そうな顔をして、どうも裏で暴君だという人、結構いる。誰とは言わないけれども。

けど福田さんという人は全く表も裏も本当に質素な人。今は変わりましたが昔は世田谷の家の応接間はベニヤ板でしたよ。日曜日なんか行くと、「おう、よく来たな。何が食いてえか、果物か菓子か」というから、「いや、両方食いたい」というと、総理の家だから、千疋屋のメロンか京都の菓子か出てくるのかと期待する。そんなことはない。果物は、いま木から落ちたような、へちゃむくれたミカンね。あとは、群馬の温泉まんじゅうですよ。これはこれでおいしいが、その質素さは、いささかも変わらない。

塀の前に、タヌキが徳利を持っている置き物があったでしょ？私はね、福田さんに「総理ね、日本の総理でしょう。総理の家に、こんな狸の置物、みっともないじゃないですか」と言ったことがある。そうしたら怒られたね。

「きみは何ということをするのか！これは大事な、私の支持者が送ってくれたものなのだ！」

こういう人でしたよ。それから、家中の電気を消し回っていたね。無駄だって。だから金権政治批判。三木さんの金権政治（批判）と全然違う。三木さんは背後に森コンツェルン（睦子夫人の実家）が控えているわけです。けど福田さんは文字通り質素な人。昼は素そば。素そばとは酢が入っているそばじゃなくて、具が何にもないそば。本当に。だからあれだけ長生きできた、と私は思う。そういう具合に、政策と自分の生活との間にギャップのない、非常に珍しい人だった。

ただし、福田さんの一番の問題は、権力欲が少なかったというか、何が何でも政権とろうとか、もうあらゆる手段を使って政権を取ろうという意欲には欠けていた。そこはやはりエリートだから。福田さんという人はあまり本を読まないのだけれども、読んだ人の話を聞くわけ。そして本を読んだ人よりもよく覚えている。これはやはり凄い能力でした。

国内的な30%を常に下回っている評価とは別に、国際的には高く評価された。サミットをやりますと断然輝いていた。フランスは（ヴァレリー・）ジスカルデスタン（第20代大統領）、アメリカは（ジェームズ・）カーター（第39代大統領）、（西）ドイツは（ヘルムート・）シュミット（第5代首相）、こういう人たちが首脳だった。あの時ちょうど「日独機関車論」という、要するに世界経済を活性化させるためには、景気の良かった日本とドイツが機関車になって引っぱらなければいけないと、まあ体（てい）よく持ち上げられたわけ。

福田さんはその時に“プロフェッサー福田”と言われた。福田さんの言うことはみなかしこまって聞いた。なぜかという、「世界大恐慌は…」と言うでしょ？ そうすると大恐

慌を知っている人が誰もいないからね。福田赳夫は1929年に大蔵省へ入って1930年にロンドンに赴任する。1929年からの世界大恐慌を目の当たりに見ている。強いですね、これは。皆から尊敬されていた。辞めた後もOBサミットをやって、シュミットと一番仲良かったのだけど、そういうことがあった。国際的な評価は非常に高いものがありましたよ。国内評価と非常にギャップがある。ただ、権力を獲ることににおいては非常に弱かった。

福田、大平、どっちにするかという話が決まっていなかったのですね。どっちも譲らない。どうするか。立会人がつく。福田に園田直。大平は鈴木善幸。その中間に保利茂がいた。そして「5者協議」で、どっちが先にやるかを協議するんですよ。だけど大蔵省の先輩だし、ということで福田さんが先にやることになるわけです。

そこで秘密の文書を交わす。秘密の文書とは、福田さんにやってもらうという話。その時どうしたかというね、ここで立会人の園田・鈴木・保利さんたちが「2年後は大平さんということを書こうとした」。そうしたら、それは書いちゃダメだ、政権を私議することになるというので、大平がダメだと言った。それでね、ほとほと感心してしまって、その帰り道、園田直と保利茂は、もう本当に参った、2年後は私たち大平内閣実現のためにやろうと思うのですよ。ここがすごいところなの。そう言っちゃ悪いけども、この頃の政権獲りとは全然違う。一段高いのです。

その暗黙の約束があるにもかかわらず、福田さんは2年後…。支持率は上がらないけれども、それなりに安定していたのですよ。さっき言ったように、それ以上、落ちないからね。福田さんは一言、大平に「もう少しやらせてくれ」と連絡すればよかったものを、しなかった。しない上に、何と言ったか。

「全国津々浦々、福田、福田の音がする」と、こうやったわけよ。

それでね、もう大平がカーッとなって、総裁選に出るということになった。あれ、ひとこと言ったら絶対、大平さんは認めていたのですよ。

あのとき新聞も完全に間違えていた。総裁予備選は誰が提唱したかと言えば三木なのです。要するに党員は総裁選に参加しなければいけない。党近代化の証しとして総裁選をやるということで党員集めもしようという話になって、総裁選をやった。総裁選をやっても福田はそれなりに国際的な実績もあるし、大平は勝てっこないというので、新聞の予想も完全に福田だったの。

ところが、一晩で引っくり返る。どうやって引っくり返ったか。これが凄まじいのね。田中派なのです。田中派の秘書軍団が全部潰した。後藤田（正晴）という参謀もいるし

ね。どうやったのか。党員は分からないのですよ、誰が党員なのか。あのとき名簿は出さなかったのですね。しかも、その名簿には犬猫がいっぱいたの。会費を 2,000 円か 3,000 円を納めればいから、みんな党員を増やすために家の中の猫とか犬まで動員していた。

ところが竹下（登）は、そこが凄いな、ちゃんと手に入れてくる。手に入れてくると言っただって一晩でどうするか？考えたね。まず航空写真で、誰の家、何丁目何番地とある、航空写真で撮った家を全部、これが党員だと潰していく。そして秘書がタクシーを借り切って全部回った。一晩で引っくり返って大平が勝つ。予備選で勝ったからといって、過半数ないとダメだよ。決戦投票があるでしょう。決戦になれば（勝敗は）分かりませんよ。分からなかったけれども、福田さんは降りた。

「天の声も、時に変な声がある」という名文句。この辺はやはり非常に潔いところがあったね、福田さんは…。

私は、福田さんが辞めた後、「総理、終わって何を一番感じましたか？」と聞いたことがあった。そうしたらね、総理の車が高速道路を通ると、右、左の車を全部止めなければいけない。まずパトカーが先に行って全部、右、左に寄る、だからノンストップで行ける、「これができなくなったことだね」と言いました。この人もまた世俗的だなと思ったけれど、そういう人だった。こういう具合に、その時は非常にあっさりとした、しかし、それは怨念として残るということで、大平になった。

大平になって“40 日抗争”というのが起きるわけです。それは何で起きるかという、大平政権の下で選挙に敗れる。これで、選挙に敗れた責任を取って辞めるべきだということで、今度は福田派の方がやるわけ。敗れたのも不信任案が通っちゃうわけだね。というのは福田派が出なかった。欠席したものだから、その分だけ過半数が下がる。あの時いろいろ右往左往して、ちょっと手違いもあったりして入らなかったということもあったけれど、福田派が中に入らなかったから不信任案が通っちゃって、解散に打って出るという話になるわけですよ。

福田が辞めろと言ったことに対して大平は、2 人だけの会談で「辞めろということは死ねということだ…」と言う。大平さんがちょうど 1970 年に日経新聞に書いた「新権力論」というのがありまして、その中で、「権力は抑制的でなければいけない」と書いている。それから（自著『総理の器量』のページを繰りながら）「権力というのは、めったに振り回してはいけないのだ」と。そういうことを書いていたのです。その人が、最も権力的なことをやらざるを得ないということの悲劇というものがあつた。



「権力は、それが奉仕する目的に必要な限り、その存在は許される」

と、その中に書いている。「権力そのものが自己目的ではない。何かをやるために権力が必要だということではなければいけないのだよ」と。

ところが、福田との間の 40 日抗争は、まさに自分の主張と全然違っていった。しかし、その大平は福田さんと会って、「辞めろということは死ぬということだ…」と言って、官邸に戻ってくるわけです。その時の官房副長官は加藤紘一です。加藤紘一に言うのです。

「加藤、俺が辞めたら、誰が総理にいいと思うか？」

加藤は言えないね。「いいから言え…」と言われた。言えない。そのとき大平さんは、「俺が総理を辞めたら、日本のために総理にすべきは福田さんだろう…」と言うのです。今と全然違うところだね、ここは。

大平さんは、閣議が終わったりすると、官房副長官は加藤紘一、藤波孝生が労働大臣だったから、「藤波君、ちょっと残って」と言って、いろいろな話をしていたのね。そのとき何度も藤波さんが聞かされたのは、

「政治とは鎮魂である」

「政治の究極的な目的は何か。人々の魂を鎮めることなのだよ」

ということをずうっと言う。藤波孝生は中曽根派だったけれど、大平さんを非常に尊敬していた。大平さんが早朝に亡くなった。あの時ちょうど衆参のダブル選挙があって藤波さんは全国に遊説に行っていた。常磐線で水戸の駅に差しかかった時、車内放送があって「労働大臣、労働大臣、もしいらしたら水戸駅のホームに着いたら窓を開けて顔を出してください」と言われる。水戸駅に着いて顔を出したら駅長が来て、「総理が朝お亡くなりになりました」と言われる。その後ダブル選挙があって、弔い合戦みたいになって、自民党が大勝する。

しかし藤波孝生は、終わってからオホーツクの旅に出るのです。邦江さんという奥さん、高校の同級生だけど、邦江夫人が心配になり、自殺するのではないかと思っずとついていく。そして稚内からオホーツクの海をずっと歩くのですよ。ちょうどオホーツクの海岸で焚火して太鼓を叩いている若者たちがいた。藤波さんは伊勢で古くから伝わる俳句の宗匠なのですね。その時こういう句を作っている。

「オホーツク海を背負ひて盆踊り…」

最果ての地、オホーツク海岸で、海を背負って盆踊りをしている人たちがいる。自分も頑張らなくては、という気になり、帰って来て、政治家をそのまま続けるという気になる。

私はつくづく思うのです。1人の人が1人の人に与える影響というのがいかに大きいか。大平さんという人はそういう人だったね。大平さんは観音寺高校の出身で、先輩に藤田藤太郎さんという人がいて、王子製紙（副社長）から神崎製紙を創る。この先輩をすごく尊敬していた。その先輩は、貧しくて大学に行けない子供たちのために自分で奨学資金をつくっていた。その人をすごく尊敬していたね。

天皇陛下にお話しすると、お菓子ね。菊の御紋の入ったお菓子があつたりするよね。それからタバコ。昔はそうだった。それを必ず、自分の家へ帰る前に、まず藤田さんのところへ持って行った。正樹という息子を神崎製紙に預けるのだけれど、難病で亡くなった（享年26）。あの時の慟哭の追悼文、いま読んでも涙が出る追悼文を息子のために書いている。

大平さんが藤田さんの神崎製紙に行く時は、どんなことがあっても玄関に車を乗りつけることをしなかった。必ず50m手前で降りていた。自分の尊敬する人のところへ行くのに車で乗り付けるそんな失礼なことにはできない。警備の人は困るのだよね。どこで撃たれるか分からないから。できるだけそういうことを少なくしようとする。しかし彼はそれを許さなかったね。それはみごと。私は、リーダーとして最も尊敬できるのは中曽根康弘だけど、人間として最も尊敬できるのは大平さん。

大平さんが（大蔵省）主査の時に、奨学金を出してくれる日本育英会の前身ができるのだけれど、予算がないから対象人数を絞ろうとする。あの時の主計局長は植木庚子郎という法務大臣やった人だね。植木庚子郎が主計局長で、大平が渋った。昔もやはり主計官や主査の方が主計局長より偉かった（笑い）。大平が渋ると、主計局長に何と言われたか。こういうことを言うのですよ。（自著より引用読み上げ）

「自分は貧しい家に生まれて、とうてい上級学校に進学できる身分ではなかった。そこで養子に行った植木家から一高一東大に進学させてもらった。男が自分の姓を変えるというのは辛いことだ。しかし、今の日本には、同じような境遇にあつて、進学を断念せざるを得ない人が多くある。私は、後進の青年のために、こうした辛酸をなめさずに忍びない。理は理として、できるだけ多くの青年に、この恩恵が均霑される（等しく行き渡る）ように考えてもらいたい」。それを聞いた大平は、すっかり参っちゃった。

「私の気持ちは雪が陽光にとけていくように溶解し、給費を貸費制度（貸すということ）に改めて、対象人員を相当増やして国会に提出した。こうして1943年、今の日本学生支援機構の前身、大日本育英会が設立された」。

やはり政治というのはこういうものだと思ふ。この世の中には残念ながら、何をや

っても優れている人がいるのですよ。理科も優れていれば、絵も描けます。今（第 32 回 2020 東京オリンピック・パラリンピック競技大会）組織委員会の事務総長をやっている武藤（敏郎）など、絵も描けば頭も良ければね。非常に不公平なのです。けども、それは如何ともし難い。

けど、一所懸命やっても日の当たらない人には、政治が日を当てなければ、政治の意味がない。そんな恵まれている人にやる必要はない。私に言わせれば。だから今度の 10 万円の給付金に私は最初から反対だった。もらってもありがたく思わないような人に、何でやる必要がある。そうじゃない人に 30 万円をやるべきなのであって、それを、所得の把握が難しいとか。そんなことは後からやればいい話であって。「公平性」という。なにが公平だという話です。

このワクチンだって、オリンピック選手が先にやるのは当たり前じゃないですか。総理大臣が先にやるのは当たり前じゃないですか。私なんか先にやる必要ないの。じっとしていればいいだけの話だから。それを堂々と言えない政治は、すごく変だと思う。自治体の長がやるのは当たり前じゃないですか。前線で頑張っている人。それを皆、言われるのが嫌なものだから言わない。天皇陛下は一番先にやらないとおかしいよ。ところが皇室は依然として言っていないですよ、やったかやらないかも。というのは、特別だと言われたくないから。「特別」なのです、この人たちは。我々よりも、重要な立場にいる人なのです。私はそういうのを打ち破って欲しい。これを喋っても少数派ですよ。

上級国民？ バカな…。上級というのは、生まれながらにしてそうではなくて、その人の役割があるのですよ。私はそうだと思う。医療関係者が全部ワクチンを打つ。当たり前ではないですか。そういう当たりの政治が行われていない。私は非常に不満です。

と同時に、さっきの大平さんの話のように、何のために政治家をやっているか。それはやはり恵まれない人のため。そういうおこがましいことを言っただけですが、私も何でもジャーナリスト志望だったかは、2つ理由がありまして、1つは「この世にはなぜそうになっているかよく分からないことがいっぱいある」わけ。その「なぜ？」に対して答えるように一所懸命やるというのがジャーナリストの仕事だと思う。それを、ジャーナリストの仕事は権力批判にのみあるかのような論がある。バカな！ それも一部かもしれないけど、権力は相対的なものですよ。

私なんか、家で全く権力ありませんからね。毎朝、娘 2 人をそれぞれ駅まで送ることしなければ父親の地位は保てない。こういう関係ですから、相対的なものにすぎないのです

よ、そんなの。権力批判なんて、そうではない。なぜ、こうなっているのか、どうすればいいのかということに答える。と同時に、「自ら主張する術を持たない人の味方になる。おこがましいけど」。そういうのがジャーナリストの役割だと私は思う。だから、困っている人の声を届けないと。総理大臣は会見やろうとすればいくらでもできるのだから。普通の人が会見やると言ったって誰も来ませんよ。だから今、SNS でそう言っちゃわるいけど適当なことをやっちゃうわけ。ということで、「政治の原点は何か？」ということをやはり考えないといけないと私は思いますよ。

それで中曽根さんね、私が最も尊敬しているのは、常に国全体のことを考えているということです。中曽根内閣ができるのは大変でしたよ。田中角榮さんかつくった内閣だから。田中角さんはなぜつくったかと言えば、「一番弱い内閣」を造ろうとした。要するに自分の言いなりになる内閣をつくろうとした。だから最初は、この内閣ができたとき何と言われたと思います？ 当時の新聞を見たら“ロッキード内閣、直角内閣、角影内閣、田中曽根内閣”、もう凄まじいものだった。そういう中で発足したのですよ。

内閣ができて、支持率はしかし、なかなか上がらない。それだけじゃない。角さんからさんざんぱら要求されるわけですよ、「早く解散やれ」と。何で早く解散やるか。早くロッキードの禊を済ませて。あの最初の敗けた選挙でも 10 何万票とるわけだから。早くやれ。早くやれば敗けるのが分かりきっているから、中曽根は責任を取って辞めざるを得ないわけですよ。そんな、できるわけがない。それで、あの手この手で、それを逃れるために大変だった。

一方で、その時どんな状況だったかということ、1 つは、まず「日韓関係は最悪」。教科書問題というのがあって、韓国では日の丸（日章旗）が焼かれ、（以後）20 年間よくなると言われた。あの時、政府の高官が公然と「韓国にはカネをビタ 1 文やらない」と言った。「日米関係も最悪」。それで伊東（正義）外務大臣は辞める。鈴木善幸さん（第 70 代内閣総理大臣）さんが「日米関係は同盟関係じゃない」と言うわけですから、おいおい。同盟関係じゃないのに、何でアメリカの若者が日本の米軍基地に来なければいけないのか、となって大変だった。そういう中で中曽根が登場する。

その時に、後藤田（正晴）を官房長官にする。これは今みな間違っ、彼は田中の懐刀だったから、田中が送った刺客だ、田中から呑まされたという話になっている。そんなことはない。鈴木善幸からそれとなく辞めると言われた時から、官房長官は後藤田だった。後藤田は自分の内務省の先輩でしょ。煙たくてしょうがない。しかも“カミソリ後藤田”

は、角さんの総理の懐刀でしょう。普通なら使いたくありませんよ。

だけど、何で後藤田かという、大きな理由は、「役所を押さえる」ことができるからです。実際そうだった。それから「危機に強い」ということです。これを重視したわけです。しかし、もうひとつ隠された理由があった。私はそれを中曽根さんにちゃんと確認した。それは「田中の風除け」です。田中の風除けのために後藤田を使ったのです。ここまでしたたかだったのですよ。ということで、まず田中のプレッシャーをいかに抑えるかというのが1つ、大変な課題だった。

もう1つは、日韓関係どうするか。最初に韓国を訪問する。11月27日に中曽根内閣がスタートして、最初にやったことは、1月5日、伊勢神宮へ参拝した、その後に突然、韓国へ行くことを発表する。僕らは本当に、私も官邸を担当していたけれど全く知らなかったね。秘かにずっと瀬島龍三という人を使って韓国との間でやっていた。密入国同然。東京でやるとバレるから。どうしたかという下関からプサン（釜山）へ行き、それで向こうの首脳と会っていた。大宰府でやったり、秘密裡にやって韓国訪問を実現する。その半年前から、もうその前から準備していた。自分が首相になったら韓国だと。そのために韓国語を勉強する。NHK ラジオの韓国語講座をテープに録り、風呂の中で聴き、車の中で聴き、覚えていくのですよ。そして突然、韓国訪問。

当時は金浦空港だった。金浦空港に、政府専用機が降り立つ。空港での第一声は半分韓国語でやる。全斗煥（チョン・ドゥファン）という人が大統領だった。その後の長い晩餐会演説、最初の4分の1と後ろの4分の1は韓国語でやる。そして晩餐会の後の、懇親会の時に「黄色いシャツを着た男」という歌、ノオランなんかというのを韓国語で歌う。全斗煥は、お返しに「影を慕いて」を日本語で歌う。これだけでなく、韓国に対する援助をやった。これで日韓関係は完全に変わる。

中曽根さんのすごいところは、それだけじゃないですよ。韓国の大統領というのは例外なく、辞めた後は監獄に行くか、家族が逮捕されるか、自殺するか、ということだった。その後、全斗煥は民主化を弾圧したということで無期懲役になる。赦されて酷寒の寺みたいなところに幽閉同然なのです。そのとき中曽根は、寒かろうというのでウールの靴下を送り、CDを送り、そして羊羹を送り、あまつさえ、その罪人を訪ねて行くのですよ。首脳間とはそういうものなのでね。

要するに一番困難なことから始める。一番困難なのは日韓関係だ。一番困難なことから始めれば次が楽になる。これなのだ。我々はどうしても一番簡単のところから始めよう

とする。ここが違うところなの。

私は、安倍（晋三）さんにその話をした。安倍が第1次内閣で最初にやったこと。日中ですよ。小泉は5年間、靖国参拝して、これ以上悪くなりようがないところまでいった。その日中関係を最初にやった。まさにあれは中曽根のやり方をそのまま踏襲したのですね。

そういうことをやって1就く下旬にアメリカを訪問して、ワシントン・ポストの朝食会で、「日本は不沈空母だ。だって日本がここにあるからソ連との間の防波堤になっているでしょう」とスピーチした。

この発言が日本では問題になったけれども、アメリカの疑問は完全に氷解する。やがて5月（28～30日）、中曽根内閣ができて半年後でしたね、ウィリアムズバーグ・サミットがあった。あの時、SS-20というソ連の中距離（弾道）ミサイル（IRBM）は、ヨーロッパのドイツ・フランス向けとアジア向けと両方あった。そしてつばら話題になったのが、ソ連を“悪の帝国”だと言ったのはレーガンだった。レーガンはソ連“悪の帝国”を絶対に許さない。ところが、独仏にとっては困るわけです。適当に仲良くしないと、いきなりやられてしまうから。フランスもドイツも妥協しようとする。それに対して日本は、置き去りにされるから困ってしまった。その間を中曽根が取り持つ。レーガンをたしなめ、フランスにも譲歩させ、それでウィリアムズバーグ・サミットは何とかまとまるわけです。

その時にレーガンは「いやー、ヤス、よくやってくれた」と。そして2人でずっと歩いてくる。その時に写真を撮る。

サミットの写真は並ぶ順番が決まっている。真ん中は議長国、両隣りが元首。アメリカ元首、フランス元首。イギリスは女王様がいるから、首相は元首じゃない。カナダもそう。ドイツも大統領がいるから違う。ということで日本は、まず絶対、真ん中に行けない仕組みになっているのです、元首じゃないから。それだけでなく、在任期間が長い順なのです。そうすると日本は大体、長くて1～2年、中曽根は6か月なのだから一番端っこのはず。ところが、あの写真を見たら、真ん中の方にいるわけだ。レーガンと（マーガレット・）サッチャー（英国第71代首相）の間にいる。サッチャーは女性ということもあるけれど、何でそうなったかという、（中曽根は）動かなかった。レーガンと話していて写真撮影となった時、そこから動かないの。写真撮影をする人は、「動け！」と言えないわけ。中曽根さん「俺も税金で来ているのだ。絶対、動くまいと思った」と。だから珍しい写真なのです。

こういう具合に中曽根さんという人は常に、飲んでも仕事の話だからつまらないところ

あるのだけれど、しかし私は、中曽根さんが亡くなった時に、「国を背負った生涯一書生」という見出しで追悼を書いた。いろいろありますよ、中曽根さん。リクルートにしたって生贄になった人がいるとかあるけれど、それも運命だし、ある種の政治でもあるし。これはしかし紛れもなく、「日本のリーダーとはどうあるべきか」を示した。あの定年制をやった時ね。あれだけ約束しているのに、加藤（幹事長）が約束したのだよね、終身比例1位と。それを小泉が宮澤喜一と中曽根康弘に引退を迫った。中曽根は、「政治的テロみたいなものだ」と言ったね。中曽根がここテーブルの下に録音器のマイクをつけていて、小泉も怒った。

私は政治家に定年制を持ってくるのは絶対おかしいと思う。50歳だって80歳みたいな人もいるし、80歳だって50歳みたいな人もいるから、それを選ぶのは国民であって。いやいや、そんなこと言ったって、その党で選ばれなければできないから、若い人が出てこれないという。だったら、打ち負かせばいいじゃないですか、そんなの。その気がなくて、どうするのですか、という話ですよ。

今の政治の一番よくないところは「ノーサイド」だ。とにかく総裁選が終わったら、もう皆仲良くやりましょうという話なのだよ。昔はそうじゃなかった。主義主張が違うからね。自民党というところは、超右翼から一番左、共産党までいる。だから他の政党が要らないわけ。必要ないの、これだけで。それを争っていたわけよ。

だから見てごらんなさい、“振り子の原理”で、政権交代は常に違うスタイルの総裁を選ぶ。大統領型・中曽根の後に超調整型の竹下登。その前に鈴木善幸さん、調整型だ。どんな主義主張を持っているか知らない。とにかく人をまとめる。総務会長を長いことやるわけ。総務会長は自分の主張が要らないの。とにかく対立しているのをまとめるかどうかだから。それしかない。総務会は昔も今も、今もそうかは知らないけれど、総務会は全会一致が原則。全会一致なんかあり得ないわけ。あり得ないのに、何で全会一致が保たれるのか。例えば脳死問題にしたってそうだ。それから「牛肉・オレンジ」も大変だった。もう死に物狂いで争わないと選挙区から怒られる。争っている姿を見せないと…。そんなことで全会一致できるか、という話だ。

そこは自民党の生み出した力。どうやるか。反対の人間は、徹底的に反対する、絶対に認められない！その後どうするか。「こんなところにはいられない！」と出て行く。反対論者はみんな出て行くの。そうすると賛成者しか残らないから、全会一致ですよ。そこには定足数なんかあり得ない。本当はあり得るのだけれども、それは無視。そうして「俺は最

後まで頑張った」と地元では言うわけよ。民主党はそれができなかったから分裂騒ぎになっていく。それから、やはり決まったことには従ってもらわなければね。ということで、これだけで時間になって……。〔「竹下先生……」の声あり〕

竹下さん、タケさんね。中曽根が竹下をなぜ選んだか。よく分かる。そこまでハッキリ言っていないけれども「私の後をやる人間に見識は要らない。残されたものだけやってくれればいい」と。それが「消費税」だった。消費税をやるにあたって誰が一番か。野党に人脈もあり、上手くまとめてくれる人。それが一番の大きな理由です。最初から竹下だった。あの時は誤報した新聞・通信社がいっぱいありました。

安倍（晋太郎）という説は、堤義明が言うわけ。佐藤孝行さんも安倍（晋太郎）を言うわけ。私も担当していたからそう聞かされた。しかし、もう話していいと思うけれど、私は、本当にそうなのだろうか？ 中曽根の意図は、みんな分からない。だけど、その時に小此木彦三郎、藤波孝生は、それとなく分かっていたところがあったね。私は、夕刊の締め切りが1時過ぎだから、もう安倍（晋太郎）で打っていいのかなと思って、最後、藤波さんに電話した。そうしたら藤波さん、何と言ったか。

「それは、聖蹟の乞食の言っている話です」

聖蹟とは天皇の御陵ね。聖蹟桜ヶ丘、天皇の陵のある所。その前にいる乞食が喋ったにすぎない。「中曽根の意思ではない」と。私は思いとどまった。安倍をやらなかった。それで誤報を免れた。

安倍さんについては、懸念したことが1つあった。それはやはり右の人たちが結構いるという、それに対して懸念を覚えた。しかし一番の大きな、竹下さんという理由は消費税をやることだった。それ以外にいろいろあるのですよ。(中曽根康弘)平和研究所の話とか、丸ごと全部その後のことをやってくれるとか、あったけれども、竹下さんが一番すごいと思ったのは…。私その時ちょうど官邸の読売新聞のサブキャップをやっていた。私は田中派を持ったことがないから、竹下さんは幹事長の時から知っているけれど、そんなに親しくはない。私が官邸へご挨拶に行った。昔の官邸ね。まず控えの間があって、秘書官室と事務の人がいて、その奥に総理の執務室があった。行くと総理執務室と秘書官室の間のドアを開けて、「いやー、よく来なすったなあ…」と言って抱きつくようにするわけですよ。そうすると秘書官も含めて、どういう関係なのか、こんなに親しいのかと思われちゃう。次から秘書官の接し方が違う。これですよ。みんなにそれをやっているのだから。これはかないませんよ。



今、政治とカネの問題がある。私もそんなに深く知らなかった。要するにお金の問題を扱う時は、いろいろあるでしょう。だけど竹下さんは絶対に自分の姿や痕跡が見えないところで動かしている。広島の実みたいに古典的な、そんなことやる人は今いないと思っていましたね。それはお金の必要な時もあるでしょうけれど、やはり間違えてはいけないなという感じ。竹下さんは（田中）角さんとの関係でも大変な思いをしたり、非常に大変だったと思う。けれども、ちゃんと佐藤榮作さんの、代沢の佐藤榮作邸を自分が借りたり、いろいろやっていた。

だから政治の極致、「竹下政治と中曽根政治」、その両方を備えることはなかなかできないと思うけれども、ただ、歴代総理からぜひ学んで欲しいという、そこは非常にありますね。私は部分的なことしか言えなかった。政策的なところは言えなかったけれども、興味のある方は、私が書いた中公新書ラクレの『総理の器量』（中公新書ラクレ）という本がありますから、ぜひ読んでいただきたい。人間的な魅力はそこにあるというね。

ということで長々と、時間がオーバーしてしまいましたけれども、ひとまず終わりたいと思います。

（この回おわり）